

## 定林寺の調査

(昭和52年11月)

立部の定林寺は『聖徳太子伝暦』や『太子伝私記』が太子建立の7箇寺のうち  
に数えている飛鳥時代創建の寺跡である。この寺跡に関する調査はかなりは  
やくから行われ、明治37年の高橋建自による『考古界』の報告をはじめとして、  
大正5年の天沼俊一による『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』などがあり、  
昭和3年には石田茂作の『飛鳥時代寺院址の研究』に詳細な研究がある。石田  
茂作は昭和28年には塔跡とその周辺を発掘調査しており、『飛鳥』に概要の一  
部が明らかにされている。

このように調査が比較的ゆき届いており、かつ飛鳥時代創建の寺跡として保  
存状態もよいため昭和41年には国の史跡に指定され、恒久保存の途がはかられ  
てきた。この寺跡は飛鳥の中でもやや奥まったところに所在するため、もとは  
訪れる人も少なかったが、高松塚以来の古代史ブームによって見学者が増え、  
これとともに瓦の採集をねらいとする人たちによる基壇周囲の荒廃も目立って  
きた。飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、明日香村教育委員会の請によって荒廃した  
指定地内の復旧を行い、傍ら将来の整備の資料を得るため小規模な調査を実施



した。

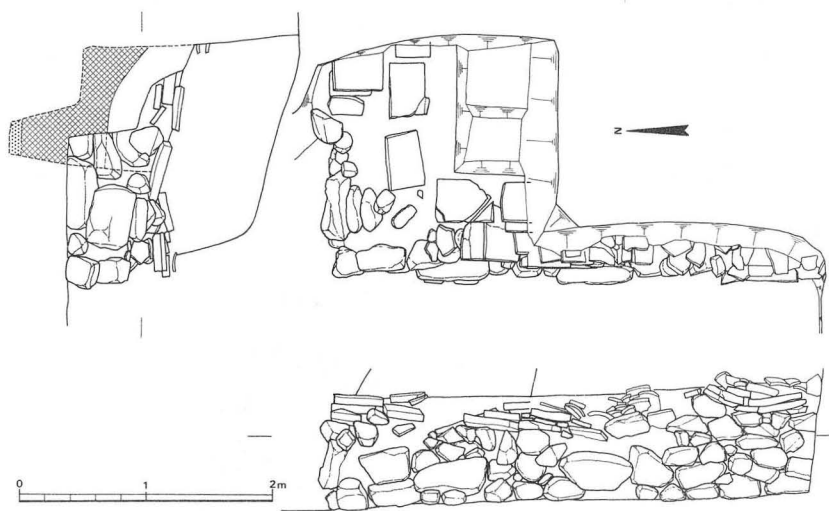
最近大規模  
に荒らされた  
のは塔跡の南、  
南面回廊とさ  
れる土塁との  
間と、推定講  
堂跡の西北隅  
付近である。

講堂跡の乱石積基壇（西から）

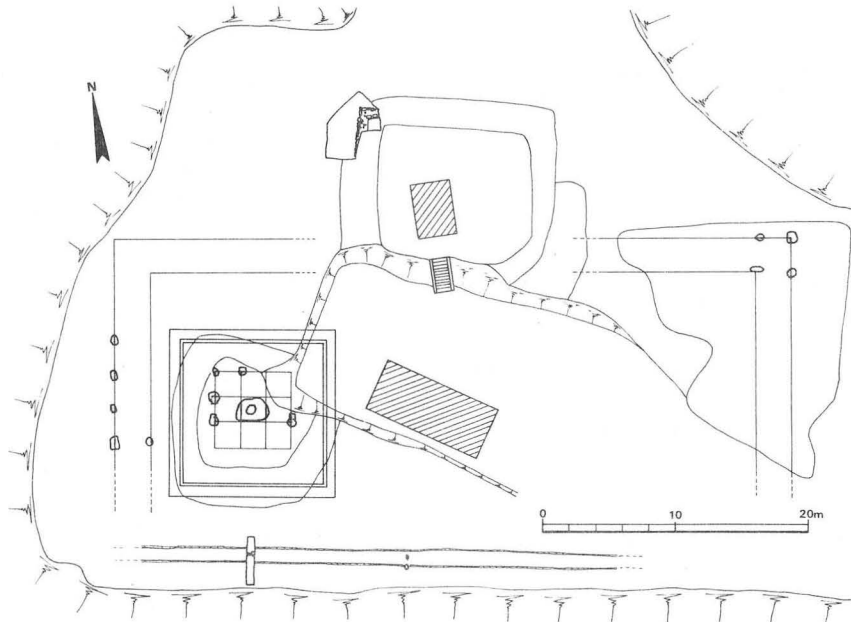
〔南面築地〕 石田茂作が昭和3年に南西回廊に推定した土塁状の高まりは塔跡の南約12mにあり、現在も南北幅0.5mの带状に東西約50mにわたって認められる。この土塁に南北3.5m、東西0.5mの小トレンチをいれた。この土塁は南面回廊ではなく築地の残りと考えられ、現高は地山面から測って0.8mある。地山と同じ黄褐色土に瓦片を多量に搗きこんで築き、人頭大の河原石を1列に並べて芯としている。崩れた築地のところどころに河原石が顔をのぞかせており、かつて中門跡とされた石は、この築地の芯を見誤った可能性が強い。築地の年代は出土瓦からみて鎌倉時代であり、この下層に回廊の存在を示す痕跡は何ら認められなかった。

〔推定講堂跡〕 この基壇は、かつて高橋健自が講堂跡と推定して以来講堂跡とされてきた。現在も東西約30m、南北約28m、高さ約2mの土壇として残り、上面には礎石の抜き取穴らしきものと、中央に春日社の祠がある。この基壇の西には夥しい瓦堆積があり、西北隅の基壇縁まで数回にわたり掘り起こしていた。この掘にそって清掃したところ乱石積の基壇が現われた。確認したのは西北隅から南4m分、東1.5m分である。基壇周囲に雨落ちなどの施設はなく、旧地表から大きな割り石を0.6ないし0.7mの高さまで乱石積みにし、その上に榛原石の板石を無雑作に横積みしている。割石の積み方はきっちりしたものはなく、か

なり雑で一部は乱れて撓んでいる。榛原石の上には瓦がのっており、瓦の一部は基壇土の中にはいりこんでいる。



講堂跡基壇実測図 (1/60)



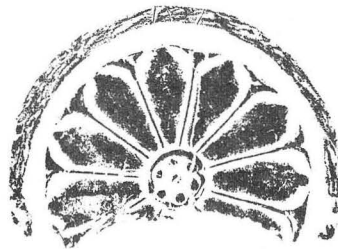
定林寺伽藍実測図（1/600）

西北隅の基壇内部を約1 m四方断ち割ったところ、乱石積には裏でめがなく、地山の上にサラサラの黄褐色土を1.3 m 余り積んだもの

で、版築はもとより搗き固めた痕跡もなかった。

以上の結果をみると、調査部分の基壇が飛鳥時代創建当初のものとはとうてい信じられない。たとえば塔跡は二重基壇で上成基壇は凝灰石、下成基壇は板石を立てているし、基壇は版築手法によって築かれている。また大和の飛鳥白鳳期の諸寺の例に徴しても考え難いことである。

定林寺は鎌倉時代に再興されたことは従来からの調査や今回の調査によっても明らかであり、また乱石積基壇は同期に遺例がある。従って今回調査した基壇は少なくとも鎌倉時代を遡ることはないであろう。ただ、基壇周辺の瓦堆積は飛鳥白鳳期の単弁11弁蓮華文軒丸瓦や行基丸瓦、格子叩きや凸面布目の平瓦が主体であったから、創建基壇の位置に再建した可能性は強いといえる。



定林寺創建瓦（1/4）